

令和6年度 学校評価 重点課題

教育目標・学校経営方針

教育目標	児童生徒の発達や特性を考慮し、一人一人のニーズに応じた教育を通して、社会で自立し、健康で心豊かに生きる人間を育む。
学校経営方針	・子どもを中心に据え、一人一人の実態とニーズに応じた教育を行う。 ・安全で安心して学べる学校環境づくりに努める。 ・学校・家庭・地域が一体となった学校づくりに努める。 ・教職員同士が協力し明るく意欲あふれた学校づくりに努める。

評価基準 A：十分達成できた B：おおむね達成できた C：やや不十分、一部改善が必要 D：改善が必要

重点目標	重点課題	具体的な取組（評価の観点）	評価	評価に対する考察	改善策・新たな課題
1 学習活動の充実 ・的確な実態把握を行い目標を設定し、教材開発や研修に努めるとともに、将来を見据えた指導を進め、体験的な学習を充実させ、児童生徒の習得レベルの向上を図る	（1）小学部段階や重度重複障害の子どもたちへのキャリア教育の推進と授業改善 ・学習指導部・進路指導部・情報部 ★関係する質問事項 No.3・4・5	・キャリア教育全体計画、キャリア発達段階表を活用し、教員間でキャリア教育の目標確認、児童生徒の実態把握を行う。育成すべき力である基礎的、汎用的能力のうち、どの能力を児童生徒に身に付けさせたいかを考え、学習活動に反映させる。 ・指導方法及び教材を工夫し、指導の有効性について確認する。検討結果を次の授業へ反映させる。 ・ホームページを活用し、研究授業及び授業研究会の様子を発信する。キャリア発達段階表で学習状況を確認し、保護者に情報提供する。	B	・昨年度より、学校課題研究の一つである「『キャリア教育』の視点を意識した社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を育成するための効果的な指導と評価の在り方」について、小学部段階及び重度重複障害のある児童生徒に焦点を当て研究を進めた。今年度は2年目ということもあり、各グループごとに対象児童または生徒を1名に絞り、対象児童生徒の実態把握、定期的な研究授業、授業研究会等を実施し授業改善を図った。教職員のアンケートからは、「キャリア教育発達段階表」の活用も含め、発達段階に応じた指導、支援の在り方を協議できた等の意見もあるが、研究の途中ということもあるのか、A評価は50%を切っている。また、保護者への情報提供に関しては、懇談等の機会はあっても、ホームページの活用をほとんどしてこなかった。保護者アンケートからは、8割近い保護者からA評価をいただいているが、ホームページを有効活用することでさらに理解を深めていただけると考える。	・今年度については、2学期中に各学部で実践した授業等について、その概要をホームページに挙げていく。次年度は、小学部及び重度重複障害のある児童生徒を対象とした「キャリア教育」に関する研究のまとめの年となる。前年度までの研究の成果を引継ぎ、また、課題についても各学習グループで共通理解を図り、学期に1回程度授業の様子をホームページに掲載するとともに、子どもたちの将来を見据えた日々の教育的な関わりについて丁寧に説明していく。また、年度末には3年間のまとめとして報告会を実施し、他のグループの研究内容についても全校で共通理解を図ることとする。
2 安全・安心 ・児童生徒が心身ともに安全で安心して学べる学校環境づくりのため施設・設備の整備、点検、訓練を通してマニュアルの見直しを行い、実践的な指導を推進する	（1）災害、不審者、事故、緊急時等に対する危機管理能力の向上 ・生活指導部 ★関係する質問事項 No.2・3	・災害時等（特に雨天時）に安全かつ速やかに避難する方法の確認、検討を行う。 ・病院と連携した緊急時訓練、防災訓練を実施する。 ・実際の訓練や教職員による図上訓練を通じた緊急時の対応の見直し、それを生かした危機管理マニュアルの検討を行う。	A	・昨年度の課題でもあった、2階からの車椅子の児童生徒の避難方法について、1学期の訓練や危機管理研修を通して出た様々な反省や意見により、12月の訓練では改善点を生かした避難ができた。担架を使用した避難の点では、児童生徒の実態によっては安全面で課題が残った。また、引渡し訓練では、雨天を想定して実施したことで、保護者の車の駐車方法や受付の場所について再確認をすることができた。 ・病院との合同訓練では、病院との連携や院内学級の児童生徒の避難についての確認ができた。 ・危機管理研修を実施したことで、気づいた点の意見交換ができ、備蓄品の保管方法やマニュアルの内容について改善できた。	・引き続き、学校の施設・設備の実情を十分に把握した各種訓練に取り組み、児童生徒の実態に応じた防災教育の充実、実践を図る。 ・安全な学校環境づくりのベースとなる様々なマニュアル等についての概要を年度当初に全職員で共有する機会を設け、共通理解を持って計画に基づいた訓練や児童生徒の指導を実践していく。

3 地域との連携 ・保護者・地域・地域の学校との連携を強化しながら、交流活動を充実させ、児童生徒が地域社会とつながることを目指す。また、地域の特別支援教育のセンター的機能の充実を図る。	(1) 保護者・地域・地域の学校との連携の強化 ・渉外部 ・特別活動部 ★関係する質問事項 No.2・4 (2) 特別支援学校として効果的なセンター的機能の充実 ・地域支援部 ★関係する質問事項 No.5	・PTA交流活動、広報誌の作成、運動会におけるバザーの実施を通じた、保護者間及び保護者と教職員間での連携した活動により、交流を深められるようにする。 ・学校間交流及び地域の人材（足特応援サポーター）を活用した交流について、活動を充実させるとともに、相互評価を実施し、相互理解を深めながら児童生徒が地域社会とつながることを目指す。 ・校内及び地域の学校や関係諸機関の方たちを対象とした研修会について、対象区域の特別支援学校や教育委員会と連携しながら、様々なニーズに応じて研修内容や実施形態を工夫して開催し、地域の特別支援教育の拠点としての機能を発揮できるようにする。	B	・PTA役員への協力依頼を中心に、教員と保護者が役割分担をして各活動を実施することができた。年間計画にはない活動（ベルマーク集計）も参加を募り、交流を持つことができた。しかし、PTA交流会以外の活動については同じメンバーの参加となっている。 ・学校間交流について、毛野中学校1年生と院内学級及びあすなろグループ（中学部のみ）の交流は本の読み聞かせによるビデオ交流（間接交流）を行った。この他、毛野小学校、毛野中学校、足利短期大学附属高等学校については、各学部と対面交流にて実施することができた。相互評価のための事後アンケートの内容からは、相互理解を深めながらの有意義な交流となっていることがうかがえた。居住地交流についても、おおむね対面交流で行うことができ、居住地におけるつながりを深める好機となった。今年度は、運動会に足利大学附属高等学校の生徒会を迎え、足利短期大学附属高等学校、足利工業高等学校の交流生及び、足特応援サポーターを依頼して、交流活動を充実させることができた。また、足特応援サポーターの活動についても事後アンケートを実施し、活動の感想や希望する活動内容を聞き取ることによって理解を深めることができた。地域の人材（足特応援サポーター）の今後の活用の仕方について、教員からアイデアを集めたので、これらの活動についても次年度参加希望を取る方向である。 ・夏季休業中に実施した研修会は、事前に対象区域内の特別支援学校や教育委員会と連絡を取り合い、期日や研修内容等が重ならないよう配慮した。対面形式でワークショップやグループワークなど体験や実践の形を取り入れた研修会を計画し、当日は多くの方たちに参加してもらうことができた。近隣地域の幼稚園や小学校、教育委員会等だけでなく、県内各地の特別支援学校などからも参加者が多数あり、研修に参加した校内の教員と意見を交わしたり、参加者同士の交流を深めたりすることもできた。	・保護者主体の活動にすることには限界があり、教員の準備が必要である。また、参加者が決まってきているため、保護者に協力を依頼する活動の精選と、参加しやすい（気軽に来られる）活動内容を検討したい。活動を精選する分、協力依頼をする内容については、保護者の意見を取り入れながら、お互いの役割分担が負担にならないよう確認しながら交流を持てるようにしていく。 ・学校間交流及び地域の人材（足特応援サポーター）を活用した交流について、相互評価のアンケート内容を簡略化し、記入いただく方の負担軽減を図り、継続して課題を考察していく。来年度については、やまなみ祭（交流学習発表会）もあるので、さらなる交流活動の充実に取り組んでいく。また、教員から提案のあった活動場面で実際に足特応援サポーターの方に活動していただき、継続できるかどうかの評価も行う。 ・児童生徒と足特応援サポーターの交流を進める手立ての一つとして、ハンドサインの伝達や関連資料の提示を検討する。 ・昨年度まで実施してきた足利・佐野特別支援教育研修会に替わるものとして、地域のニーズに応じた研修会を企画、運営することができた。今後も、病弱特別支援学校としての専門性を生かしながら、研修内容や実施形態などを工夫して、校内及び地域の学校や関係諸機関の方たちの研修の場を設け、参加者同士の情報交換や互いにつながりができる機会となるようにする。また、学校ホームページや地域支援部だよりなども活用して、適宜情報を発信していく。
--	--	---	----------	--	---

4 意欲向上 ・ 明るく意欲にあふれた学校づくりに向け、常に児童生徒の成長を中心に据え、教職員間の信頼関係と協働体制の確立、専門性の向上に努める	(1) 円滑な業務遂行に向けた教職員の体制づくり ・ 各校務分掌部 ★関係する質問事項 No. 1	・ 校務分掌部会（学期に1回）の実施により、部の業務についての共通理解を図り、協力して業務に取り組むための業務分担、相談先等を確認するとともに、業務の見直しを行う。	B	・ 業務の確認と適切な業務分担を目的として作成した年間計画を基に、分掌部会での業務予定の共有を行った。共通理解を図ったことで、各分掌部が担当する行事・研修などの準備等、必要な場面で部全体の協力体制を敷くことができた。また、分掌部及び係のTeamsのチャットを活用し、連絡を取り合いながら業務を進めた。担当する行事・研修などの時期は、互いに声を掛け合いながら業務を遂行することができた。	・ 各分掌部の業務内容の見直しの際に、年間計画を活用することで、更なる業務のスリム化と適切な業務分担を目指す。具体的には、9月、1月の分掌部会にて、各係の業務予定について情報共有を行うとともに、年間計画を資料とし、係の業務分担のその時点までの進捗状況や見直しが可能な点について、検討を行うようにする。また、1月の分掌部会においては、係の目標についての反省と、次年度に向けての目標を検討する。
	(2) 教職員の専門性の向上 ・ 学習指導部 ★関係する質問事項 No. 2・3	・ 課題研究に関する研究授業の実施においては、事前の指導案作成や授業後の話し合いにより教員全員で研究に取り組む。 ・ 教育課程研究集会の伝達会を継続して実施するとともに、各研究グループの授業の指導案や、課題研究日の話し合いの記録を閲覧したりすることで、知識を深める。	B	・ 昨年度に引き続き、これまでの学校課題研究の経過を踏まえ、栃木県特別支援学校教育課程研究集会の伝達会を実施した。今年度は各研究グループとも研究テーマ実施2年目となり、対象児童生徒を絞り研究を進めた。また、今年度から教師一人1研究授業を実施せず、対象児童生徒の授業を学習グループ全員で作り上げるという実施方法に変更した。これにより、教材、指導方法等についてより深く検討され、ひいてはどの子どもを指導する際にも効果があったと考える。実際に、各グループの記録をみると、検討会ごとに様々な提案がなされ、授業改善につながっている様子があった。	・ 次年度は、各グループとも課題研究のまとめの年となる。これまで2年間の成果と課題を元に共通理解を図り授業実践、授業研究会のサイクルを繰り返し、授業改善を実施していく。今年度以上に、各グループの検討会の記録を確認してもらえよう係が積極的に周知するようにする。年度末には、各グループの研究の報告会を実施し、栃木県特別支援学校教育課程研究集会の三つのテーマに沿って設定した本校の学校課題について、成果や課題を全職員で共有できるようにする。